

中央アジア・ウズベキスタンへの旅行記

Voyages to Republic of Uzbekistan

渡邊 正元

Masamoto Watanabe

1. 序章

大学の夏期休暇等を利用し、世界各地を訪れるのを楽しみとしている。企業の研究所に勤務していた頃は、調査の為、欧米を駆け巡ったが、次第に興味は人間の歴史を辿る旅へと変わってきた。これまで数多くの遺跡や嘗ての文化の名残の土地を尋ねたが、私の好奇心は増すばかりである。昨年訪れた中央アジアのウズベキスタンも又、人間の偉大さと愚かさを感じる旅であった。

関西国際空港からウズベキスタン航空にて8時間の旅だが、途中アジアの屋根と言われる天山・パミールの一部を機上から見た。永久氷河をもった大山塊の広がりであった。太古から人間は、この大山岳地帯に細い道を造り、それによって東から西へ、西から東へと往来していた。シルクロードが出来る何千年も前から、いかなる障害があろうとも、それを突破せずにはおかないという人間の意志によって通じあっていたのである。タシュケント空港に着き、機外に出た途端、7月上旬の摂氏50度の熱い風が息をつまらせた。

その晩はタシュケントのホテルで一泊し、次の日の早朝の飛行機でウルゲンチへ向かったが、気付いたことは、この町の夜の美しさと星の美しさであった。中央アジアは日本に較べ空気が格段に澄んでいるからであろう。

ウズベキスタン共和国はシル・ダリヤ川とアム・ダリア川に挟まれた中央アジアの中心部分だが、国土の大半はキジル・クム砂漠に覆われている。東部には天山山脈の枝脈が迫り、緑豊かなフェルガナ盆地がある。キジルクム砂漠には金(世界第4位)と天然ガスの豊富な資源がある。砂漠の大河アム・ダリアがアラル海にそそぐ最下流の町ウルゲンチでは青い空から強い日射しが容赦なく日干し煉瓦の小さい家並みを照りつけていた。

今回の旅は主にヒヴァ、ブハラ、シャフリサーブス、サマルカンドの四つの町を訪ねたわけだが、これらの古い町は砂漠の熱に抱かれた歴史の渦巻く素晴らしく魅力的な町だった。夏には気温が摂氏45度から50度にまで上昇するが、これら四つの町は巧妙な円形に造られており、道路の片側は日陰になるように配慮されている。円の中心には堂々としたスカイブルーのイスラムのドームと、細く高いミナレットの尖塔が日差しの強い家々の上に蜃気楼の様に揺らめきながらそびえていた。大きなアカシアの木や広いニレの木陰に身を隠しても、その暑さは身にこたえた。

2. ヒヴァ

ウルゲンチの西南約30キロの所にあるヒヴァは「太陽の土地」という意味で、人口3万人位の小さい町だ。アム・ダリヤ川下流のオアシスの町で、カラ・クム砂漠への入口として繁栄した。四方を砂漠に囲まれながらもアム・ダリヤ川の肥沃なデルタ地帯として、人間が住み始めたのは四～五千年前のことだが、絶えず外敵の侵略を受けて興亡を繰り返した。8世紀にはアラブ人、十三世紀にはチンギス・ハーン、十四世紀にはチムールの大軍に踏み潰された。

十六世紀末からホラズム汗国の首都として栄えたが、十八世紀にはペルシアに叩かれ、十九世紀にはロシアに隷属し、1990年ロシア崩壊の後、独立ウズベキスタン共和国の一都市となる。

ヒヴァは外敵の侵入を防ぐため、二重の城壁で囲まれていた。外側の城壁は長さ約6キロだったが、今はほんの一部に残骸を留めるだけで、内側の城壁との間には騎馬が二騎並んで通れる程しかない。城壁の高さは7～8メートル、基部の厚さに5～6メートルもある。この厚い壁の内部には、数百から数千人の人骨が埋めこまれているという。その一部の骨は壁の表面に露出していた。

新しい居住区と、汗国時代の城壁内居住区（シャクリスターン）とは、はっきり分かれている。土地の人はその内域のことを「イチヤンカラ」と呼ん

でいる。この中に、モスク（教会）、メドレッセ（神学校）、ミナレット（塔）、王宮、ハレム、牢獄、処刑場、奴隷市場、キャラバンサライ（隊商宿）などがある。

ヒヴァは中央アジアにおける中世イスラムの封建都市国家が完全な姿で残されており、最近ユネスコの世界遺産に指定された。

ヒヴァの内域の西門を入れてすぐ目に入るのは、基部の直径 14 メートル、高さ 20 メートルもある青いタイルで蔽われたカルタミナレットである。これはヒヴァの王アミン・ハーンがブハラのカラーンミナレット（高さ 46 メートル、1127 年）よりも高く、109 メートルのものを造り、頂上から 400 キロ離れたブハラの町を見張ろうと考えた。これを知ったブハラの王ハーンが職人を買収して、工事を止めさせたので、怒ったアミン・ハーンが職人を殺してしまった。1853 年に着手されたが、アミン王国は亡び王は流刑にされて滅亡したので未完成のまま残った。

ヒヴァで最も印象的なモニュメントはバフラヴァン・ムハマド（1247～1326）廟だった。メインストリートから南に行ったところにある廟で、ヒヴァの大臣で哲学者であり、詩人であった彼の墓を中心にした、その親類の廟である。彼は財産の全てを貧しい人に分け与えたという。霊廟には鮮やかなブルーの彩釉タイルで覆われた円蓋が架けられ扉には見事に彫刻が施された象牙で飾られている。タイル張りの壁に記されている多くの詩の一つには「愚かな人と一分話をする位なら、百年囚人になった方がいい」というのがある。

タシユ・ハウリ宮殿は 1830 年に東門の近くに、国王アラクリ・ハーンによって建造された。ヒヴァの中で最も豪華なタイルで飾られている。儀式が行われたアイヴァンと呼ばれる高い柱のテラスの天井は、木枠とカラフルな幾何学模様を巧みに組み合わせて豪華さを強調している。そこには、彼のお気に入りの妻のための大きな木製ベッドが置いてある。

ハーンは 4 人の正妻を持ち、40 人余りの側妾を持った。側妾たちの個室は広さは十平方メートル位で、ベッド一つだけで鉄格子の窓が付いていた。王の飽くなき獣欲に奉仕させられたわけである。ハレムの女は裁縫や刺繍を

して自分で生計を立てていかななくてはならず、中庭に出る事すら許されなかった。

ヒヴァのバザールは一本の商店街が伸びているだけで、商店は道の両側に並んでいる。約三世紀に亘って中央アジアで奴隷市場がある町として一番知られていた。今ではみやげ物、日用品、手芸品等の商品が売られているが、ここで鎖につながれた奴隷が売買されていた。

ヒヴァの王ハーンは奴隷を仕入れるために近隣の住民や旅人を襲わせた。十八世紀には南下してきたロシア人を捕らえて売り出したので、ロシアは軍隊を派遣してロシア人奴隷の解放を要求した。1873年にロシアの支配下に入るまで奴隷の売買は続いた。

バザールの中央に一つの門があり、そこから隊商宿に通じていた。隊商宿は大きな広場を取り巻くように造られており、その大きい広場は駱駝のパーク場で、何十頭もの駱駝がつながれていた。長い砂漠の旅をしてきた商人達は駱駝の鳴き声を聞きながら寄宿舎のような小さい部屋に入って眠る。

3. ブハラ

ヒヴァから480キロ南東へ行くと、ブハラに着く。アラル海に向い北上するアム・ダリヤ川に沿って、バスは右にカラ・クム砂漠、左にキジル・クム砂漠を見ながら約8時間位ドライブした。これらの砂漠はあくまでも平らで、風に刻まれた波状の小丘の連なりを造っている。その小丘の波は、正しく砂漠の表情を見せてくれた。8時間の車の旅行の途中、全く民家もなく2、3時間でバスを止めて小休止をし、炎天下の砂漠に適当な場所を探して用を足した。曾野綾子はよく砂漠を旅行されるが、女でトイレがないと困るような人は連れて行かないと何かで読んだことがあるが、実感である。旅行中、現地ガイドが云うには一見何も生物はいないように見える小石と砂の砂漠にも、無数の小動物が住んでいるとのこと。又駱駝草、正式には「カリユーチカ」は根が地下10～20メートルも深く張っており、その茎を切って西瓜やメロンの種を撒くと、地下深くにある水を吸い上げて芽を出し、大きな甘い実が

なるという。途中でこのようにして作った大きいメロンを買って食べたが、とても甘いものであった。大きなメロンが日本の金で約 20 円という安さであった。この駱駝草の灌木は駱駝や羊の飼料になり、旧ソ連時代はヘリコプターで空から種を撒いたこともあるという。8 時間の砂漠の車の旅は「点と線」で点を結ぶ線は長く単調で単色で変化に乏しく、何もかも乾ききっている。その線の果てに忽然と美しいオアシスの町を見た喜びは格別である。ブハラがオアシス都市として出現したのは、紀元前一世紀頃と言われる。古代ソグト人達の集落が出来、やがて家族や財産を守る為、城壁が造られたのはずっと時代が下る。八世紀には、アラブ人の侵入によって城壁は破壊された。九世紀には地元貴族のサマンがアラブ人に推されて王朝を設立し、産業を興し、学術文化を振興してブハラの黄金時代を築いた。それもやがて遊牧民カラハンが取って替わった。十三世紀のチンギス・ハーンの侵略、十四世紀のチムール大軍の侵入と、その都度市民の生活はつぶされ、多くの血が流された。今残っているのは十六世紀のものが大半だ。ブハラはサンスクリット語で「僧院」を意味するが、その名の通り宗教の町で、全中央アジアからイスラムの信者が集まり、嘗ては 360 のモスク、80 のメドレッセがあったと云う。又、シルクロードの主要な拠点として繁栄した商業の町で、38 のキャラバンサライ、45 のバザールがあったという。然しこの町も繁栄と破壊の繰り返しで大部分が破壊されたが一部は再建されて現在も残っている。今では人口 25 万を越える。砂漠の中に並木とともに都市街が造られ旧ソ連時代の安っぽいコンクリートプレハブの高層アパート群が延々と続いている。

歴代ブハラ・ハーンの居城のアルク城は、古代ブハラ発祥の地で、二千年以上前に出来たという。七世紀に女王クッタ・ハウトンがこの城でアラブと戦い、モンゴル来襲の際は立てこもった多くの市民がチンギス・ハーンの軍隊に皆殺しされ、城も破壊された。その後も再三外敵に破壊されたが、今のは十八世紀のもので、城内にはモスク、王座の間、ハーンの居室や牢獄などがある。牢獄はこの地上で最悪のもので窓も無く、土の床の中央を走っている角材だけで、それに囚人の足を結び、鉄の足かせがかけられていた。

ブハラで見落とせないものは、最も美しいイスマイル・サマニ廟で日の光で見ても、月の光で見てもその時々で美しさが違う。キーロフ公園の木立の中、石段を下りた低地に正方形で、まるで宝石を収める小箱のようにこぢんまりと鎮座していた。サマン王朝(874年～998年)の最後のイスマイル王が、父を葬るために造った、素焼き煉瓦だけで30種以上の美しい模様を組み合わせている。

ブハラは「世界で最も不思議な秘密の街」として英国人バーンズによって1832年世界に紹介された。当時中央アジア最大の隊商都市として宝石、中国の茶、インドの砂糖、マニラの香辛料等がバザールを飾った。奴隷市ではペルシア人、中国人、ロシア人が品定めされ、売買されていたという。今でもブハラの街には道の交差する十字路に、すっぽりと大きな屋根がかぶさり、30軒ほどの商店を収めた屋根付きバザール「タキ」が幾つか残されている。

「タキ」と言うのはタジク語で「商店」の意味だが、同時に幾つかの丸屋根の組み合わせからなるバザールの意味でもある。道路が幾本も交差する目抜き場所に建っている丸屋根で覆われた店のことで十六世紀初めに造られた。ブハラのものが最もよく保存されている。

4. シヤフリサーブス

ブハラからチムールの故郷の町シヤフリサーブスまでは南東へ約290キロで、車で約4時間半で着いた。シヤフリサーブスはカシユカダリ川の流れて育まれたソグディアナの古都、七世紀には玄奘も印度への途上に立ち寄った。十四世紀にはチムールはこの地を地盤に広大な帝国を築き、侵略した国々から芸術家や建築家、技術者を連行して「世界一美しい都」造りに働かせた。チムールは24年の歳月をかけて、壮大な大宮殿を建設した。成功した人間が故郷に錦を飾ったわけである。しかし、十六世紀後半には、ブハラのアブドウル・ハーンによってほとんど破壊された。道を行く女達は色とりどりのネッカチーフをかぶり、美しい模様のガウンを羽織って歩いている。彫の深い眉の濃い皮膚の色も浅黒い女が多いが、ロシア系の金髪の白人そっくり

の若い女もおれば、日本人そっくりの東洋系の顔をした人もいた。

勝利の門とレーニン広場の間を歩いて行くと、目の前に十階建てビルほどの土塊が二つによっきりと建っている。チムールが残した壮大な建造物のアク・サライ宮殿は入り口アーチの残骸だけが残っている。上塗りの粘土がはげ落ちて内部の土色の煉瓦組みが臍物みたいに露出していた。高さは約38メートルある。元の高さは約50メートルで、その上に二つの門柱を結んでアーチがかかっていたという。暗い階段で頂上まで上ってみた。下の方の4～5メートルはタイルが剥げ落ちて、土色の地肌を見せている。その上は青色のタイルのイスラム模様とイスラム文字が見えていた。

この入口アーチから南に昔は大理石が敷き詰められた中庭が広がり、現在チムール像が立っている辺りに宮殿があったという。

次にチムールの父が眠るドルッティロヴァット建築群を見学した。中庭に入ると右手に青いコク・グンバスモスクが見え、それに向き合って二つの廟が並んでいた。

5. サマルカンド

シヤフリサーブスを見た後、北へ170キロのサマルカンドに行く。町に入ると、鮮やかに彩られた夢の中へ踏み出したようだ。

渦巻くような色が混ざり合って出来たスカイブルーのドーム。現在のサマルカンドは伝説と歴史がユニークに混じり合っている。

チムールは手に入れた領土の先々から優秀な職人や建築家を徴発し、サマルカンドを壮大な建造物の立ち並ぶ都に造り替えた。チムールの好んだトルコ石の青はサマルカンドを特徴づける色となった。かくして首都として栄え「東洋の真珠」「イスラム世界の宝石」と呼ばれた。チムールは「地球の眼であり、星でもある」と表現した。

サマルカンドのシンボルはレギスタン（砂の土地の意）広場だ。三つのメドレッセが生み出す見事な調和を保っている。この中で一番古いのが向かって左側のウルグベクメドレッセで、1420年に領主で哲学者でもあったウル

グベクが建てた。イスラムの高等教育で中世の大学院的役割を果たした。中には宿舎が50室もあり、100人の学生が寄宿して領主のウルグベク自ら教壇に立ったという。35メートルの高さがある入口アーチには青い星をモチーフにしたタイル模様が描かれている。向い側が1636年に完成したシエルドルメドレッセだ。シエルドルとは「ライオンが描かれた」という意味で、入口アーチに庭を追うライオンが描かれている。イスラムは偶像崇拝を禁止しているが、あえて禁を破ったのは、支配者が自分の権力を誇示しようとしたためである。

現在サマルカンドにある遺跡の大部分の物は、チムール帝国の影を映したものである。チムール帝国の運命を象徴しているのは、ビビハニムで、イスラム世界で最大の規模である。1399年インド遠征から帰ったチムール王は世界最大のモスクを造る決意をする。建設には各地から集められた200人の職人と500人の労働者が使われ、1404年に異例の速さで完成した。これにはチムールの愛妃の不倫の言い伝えが残っている。妃に恋焦がれていた建築家が、期限までに完成させる条件に、一度きりの接吻を願い出た。妃は王に愛されるものと拒まれ、幾つかの卵の殻に色を着けて示し、色は違っても中身は同じ、仕官の女なら誰でもあげるからあきらめるように申されたが、建築家は二つのコップを持ってきて、どちらも同じ色をしているが一方はただの水、片方は心を惑わせ、奮い立たせる酒です。余人では駄目です。一度の接吻をお許しくださいれば必ずモスクを期限通り完成させますと迫り、妃はついに折れて接吻を許した。その跡がアザになってしまった。この事実を知ったチムール王は建築家に姦淫の罪で「宙吊りの死刑」を宣告し、市民の見守るなかで、ミナレットの塔上から足をロープで縛って突き落とした。翌日妃は後を追ってミナレットの塔上から投身自殺をした。

チムール王はこの事件以来、女性は全てワランシャ（黒いベール）で顔を覆わせることを法律で決めた。然し最近ではワランシャをつけている女性はほとんど見かけなかった。

6. 終章

ウズベキスタンの旅で最も楽しかったことは、その土地が持っている歴史を考えることであった。今まで持っていた歴史の欠片が、その土地を尋ねてみると、まるで違った生き生きとしたものになるのを感じた。

何度も繰り返された歴史、何度も入れ替わった人々、そして、其の度に再び花開いた文化、他の民族と融合し、歴史の中に埋もれていった人々、砂にまみれ熱い太陽に焼かれた数々の遺跡を訪ねて、思い出の多い旅であった。

今度旅した道は戦乱を運ぶ道でもあった。よく知られているものだけでも、アレクサンドロス大王の東征、イスラムアラブの侵入、モンゴル軍チンギス・ハーンの破壊、チムールの侵入など数知れないほど繰り返された。然し破壊の後には建設があり、前の文化を受け継ぎながら、新しい価値観にかえて再生し今に残る町並みや壮大な歴史的建造物で数多くの世界遺産を創り上げた。

オアシス都市は遊牧騎馬民族にとって、物質供給の面からもなくてはならない存在だった。その為オアシスを支配することは、彼等の最も重要な課題であった。チンギス・ハーンの中央アジアの侵略は1219年の秋から1227年の初めまで約7年に及んだ。彼のやり方は一つの町を攻め落とすと、若い男は捕虜とし、老人・子供は皆殺しに、若い女は全部凌辱し、あとは略奪の限りをつくした後火を放った。捕虜にした青年で次の町を同じ手で攻めていく。あらゆる所を馬蹄下に蹂躪し、あとは無人の野と化した。

一つの民族の興亡の間にはその民族の悲しみや、悦びを伝える挿話は無数に生まれている筈である。紀元前から今日まで、数え切れないほどの美しい恋も悲しい別離も、幸福も不幸もあった。

中央アジアの古い都市のイスラム寺院のミナレットの塔頂は申し合わせたように青い。海の青さとも空の青さとも異なった一種独特の強い青さなのである。

嘗て玄奘が足跡を残したシルクロードは歴史の宝庫であり、様々な遊牧民たちが入り混じり、人種の坩堝とも言える民族の多様化、旅人の安堵を語るオアシスの町並み、そして荒涼とした乾ききった砂漠の大地であった。